鳴門教育大学小学校英語教育センター紀要　第８号，1－14，2017

これからの小学校英語の役割と課題

平成 29 年度鳴門教育大学小学校英語教育センターシンポジウム基調講演

吉田　研作（YOSHIDA Kensaku）
上智大学 特別招聘教授 言語教育研究センター長

どうもありがとうございました。只今ご紹介にあずかりました上智大学の吉田です。先ほどありましたように、1974 年から上智で教えていますので、今年で 45 年ということになります。長いです、かなり長く勤めております。

その間、特に 1990 年代の半ばあたりから学習指導要領の改訂であるとか、あるいは教員指導者研修で各都道府県から優秀な先生たちを集めて、つくばで研修をしたり、その後、全国でいくつかのブロックに分かれて研修しました。先ほどその時のブロックに参加された先生もおられたという話を聞きましたが、長く色々仕事をしてきたと、自分ながら思います。

今日は、これからの英語、特に小学校の英語教育がどうなっていくのか、今回は特に学習指導要領が改訂されましたので、その持つ意味というような、そういうことを中心に色々話をさせていただきたいと思います。

それでは、まず最初にお話しさせていただきたいのは、今回英語教育の改革が小学校から大学の入試まで、全てにわたって行われている訳ですけれども、たぶん第二次世界大戦後、最大の改革ではないかなと私は思っております。大学入試に関しても皆さん既に報道などでご覧になったり、お聞きになったりしていると思いますけれども、大学入試が４技能化されるということはもう決定しています。

ということは、今までは中・高を中心に英語教育を色々変えようと努力を皆さんしてきた訳ですけれども、最後の最後大学入試のところで、結局はリーディングでいいんだ、語彙と文法が分かればそれでいいんだという結論に至ってしまった結果、なかなか改革自体が上手くいかなかった。

それを今回は大学入試も４技能で、「読む・書く・聞く・話す」という全ての能力を測るということが決まったことによって、高校教育、また中学校・小学校への波及効果というのは非常に大きいのではないかと思います。

もう一方では、小学校の外国語活動および今回は教科としての外国語というのが新たに加わります。これは非常に大きな改革、特に小学校で教科にするということは今回はじめてのことですので、これが持つ意味というのは非常に大きいと思います。

なぜこのような大きな改革をやらなければいけないのかということなのですが、日本人の英語力に関する自信のなさというのが色々言われたりしている訳です。

その１つのデータとして、これはベネッセさんが２年ほど前に調査をされた結果です。中学生・高校生に対して、これから身につけたい英語力はどういうものですか？と聞いている訳ですが、ご覧のように中

学生も高校生も英語が必要ないと思っている子は殆どいない。

何らかの形で今後英語が必要になってくるとみんな思っている。95%以上の子どもたちは英語は必要だと、たとえ海外旅行で必要だという程度であったとしても、必要だと思っている訳ですね。だからそういう認識をみんな持っている。

更に、英語に対する意識ということを調べてみますと、英語ができたらかっこいいと思っている。90%の子は英語ができるとかっこいいと思っていますし、ここが大事だと思いますが、英語ができたら良い仕事に就ける、就職に役立つということを思っている子もやはり 90%近くいる訳ですね。

ですから、英語は何らかの形で今後必要だろうし、自分にとっても英語ができたら良いことがあると思っている訳なんですが、就職に役立つから英語は必要だと思っていると言っていながら、英語を使った仕事をしたい子はそれほど多くないですね。３分の１まで減ってしまう。

理由はたぶんお分かりになると思いますけれども、必要だというのは頭で分かっていることですけれども、実際に自分ができるのか、自分で自分に問いただしてみた時に、「あまりできないな、英語を使わなきゃいけない仕事というのはちょっと大変だな」というので、結局そういう仕事は自分はしたくないという風になりますね。

もう１つは、留学ですよね。「高校とか大学で留学をしたいと思いますか？」、高校生でさえ 34.2%ぐらいしか留学したいという子はいない。今回ここではデータとしてお示ししていませんけれども、アメリカと韓国と中国と日本の高校生を比較したデータを見てみますと、韓国の高校生のうち約 80%ぐらいが留学をしたいと言っていますし、中国も 70%以上は留学をしたいと、アメリカの高校生もだいたい 65%ぐらいは留学をしたいと言っているんですね。ところが日本の高校生は留学をしたい人が 34%しかいないんですね。

つまり、この４つの国の高校生の中で、唯一留学をしたくない方が多いのは日本なんです。その理由というのを聞いてみると、だいたい６割５分の人が答えている一番大きな理由は、外国語に自信がないんですね。やはり英語は必要だと思いながら、自分ではできない、自信がない。だから実際には使いたくない。あるいは使えないということが本音かもしれませんね。

それに対してこの方が私はショックを受けたのですけれども、先ほどのベネッセさんのデータと同じところから取ったものです。今後、社会で英語がどれぐらい必要になるだろうか？ということと、自分が将来英語を使っているイメージはどれぐらいありますか？というのを聞いている訳ですね。

そうすると、ご覧のように 90%以上の中学生は社会で何らかの形で今後は英語が必要だろうと思っていますが、将来自分が英語を使っているイメージはないんですね。44.2%の中学生は、「私は英語は将来使っていない」、「社会では使っているかもしれない、他の人は使っているかもしれない、でも僕は使わない」という、これもやはり自信のなさの裏返しと言えると思います。

高校生に至っては、同じように社会で英語は必要ないと思っている子は 10%いませんけれども、自分が英語を使っているイメージがないというのは 46.4%ということになります。頭で分かっていても自らが使う自信がないというのが中高生の今の姿ではないかと思います。

ただ、これは中高生だけではないんですね。産業能率大学が 2001 年から新入社員のグローバル意識調査というのをやっています。ここにあるのが一番新しいもので 2015 年のデータなんですが、新入社員ですから大学を出たばかりで、会社に入ったばかりの 20 代前半のまだ若い人たちですよね。

それで、自分を含めた企業です。日本の企業はグローバル化を進めるべきか？ということに対しては、73%の人は進めるべきだと言っています。今の時代が時代ですから、グローバル化は進めなければいけな

いだろうという訳ですね。

では、グローバル化が進めば外国人の労働者が日本に来るということもありますが、日本人が海外で活躍するということも必要になってきますよね。その海外で活躍するために必要な能力は何ですか？というと、圧倒的に「語学力・コミュニケーション力」なんですよね。

これがなければ今のようなグローバル化の時代の中で、会社の中でもちゃんとやっていけないだろうということは、みんな分かっています。ところが、海外で働きたいと思いますか？というこの質問ですね。これに関しては 2001 年が 30%弱が働きたくないと言っていたのが。段々だんだん海外で働きたくないと答えている 20 代の若い人たちが増えて、2013 年に 58.3%になった時に、これは大変だ、半分を超えてしまったとびっくりしていたら、2015 年、それよりもっと増えてしまった。63.7%。若い 20 代の日本人が海外で働きたくないと言っているんですね。これは大変なことだと思います。

その理由というのは、圧倒的に「自分の語学力に自信がないから」、これが一番大きいですよね。そうすると中学生も自信がない。高校生も自信がない。大学を卒業して社会に入った人たちも、自分の語学力に自信がないと答えている。

では、「今の自分の英語力はどれぐらいだと思いますか？」と、中学校で３年間やってきて、高校でも３年間やってきて、たぶん大学で最低でも２年やって、もっとやっていたかもしれませんが、大学を出たばかりの若い人たちが「英語は全くできない」と答えている人が 50%近くいる。それでビジネス上の折衝とか交渉レベルの英語力が私はありますと自信を持って言える人は２%もいない、こういう現状が今の日本に見られる。これを見ると特に日本の企業は非常に心配をしているということは明らかです。

ですから、随分前になりますけれども、1999 年に「日本の構想」懇談会というのが、当時小渕さんがまだ首相だった頃に招集されまして、その時に出て来た報告書の中で日本の企業が日本の英語教育がこれ以上上手くいかなければ、いずれ英語を日本の第二公用語にしなければいけなくなるのではないかというような提案が実は 17～18 年前に実際起こったんです。

今はそこまでの話はしませんけれども、色々文部科学省としては変えようとしてきました。また政府としても、英語が使える日本人を育成するための戦略構想というのを打ち立てて、それを具体的に文部科学省の中では英語が使える日本人を育成するための行動計画という形で、具体的にやってきました。

その頃の会議に私も出ていましたけれども、議論された中に「スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール」(SELHi)、高等学校でコミュニケーションに特化したような授業をどんどん推進していけるような、そういう研究開発校に対して補助金を出しましょうというプログラムができたり、悉皆研修といって中学校･高校の英語の先生たち６万人全員に 10 日間､英語の研修をやるというのが入ったりしました。

そして、その時に話題になっていたのが、小学校から英語を始めなきゃダメだろうということで、2000 年代の初め辺りから色々議論され始めました。その頃から、総合的学習の時間の中で英会話をやってもいいということで、色んな研究開発校が小学校でも英語を取り入れ始めたんですね。

そういう意味で行動計画の中で何とかして英語教育を良くしようという努力は凄くしてきたんですが、その結果が先ほど見たようなデータで、あまり成果として出ていないのかなという、結局 10 年経っても変わらなかったという、そういう状況なんです。

これではやはりマズイということで、今回、学習指導要領全体に関わる問題なんですけれども、文部科学省としては日本の若い人たちの全ての教科における学力ですが、それを上げるためにどうすれば良いかということを考え、そしてその結果、「資質・能力の３つの柱」、学力の３要素という言葉でもよく言われたりするのですが、これをもう一回きちんと見直すことになりました。

まず「知識・技能」、これは今までやってきたことなんです。だから例えば英語のテストなんかを見ても、この単語の意味は何ですか？と問うとか、この文法のここの空欄を埋めなさいとか、あるいはこの英文を日本語に訳しなさいというような、問題はたくさん今でも出ていますよね。そういうのは何を試しているかというと、知識・技能ですよね。英語の知識がどれだけあるかというのをずっと試してきた。

最近は、よく「パフォーマンス評価」というようなことが言われたりしますけれども、実際に喋れるかどうかとか、本当に英語が書けるかどうかということは殆ど評価されてこなかった。あるいはその評価の方法も分からないというので、ないがしろにされてきたのが現実な訳です。これは他の教科においても、例えば歴史においても何年に何が起こったかというような知識・技能ばかりが、今までずっと評価されてきたという訳ですよね。

これでは知識・技能だけで、それを活用するというところまで行かないのではないか。これをきちんと活用しなければ、日本人は本当に学力的にこれ以上、上にはあがっていかないだろうということで、今回はこの知識・技能を使って「思考力・判断力・表現力」を育成するというところに、より大きな重きを置きましょうということになりました。

だから、どうやってこの知識・技能を使って物事を考えるのか。この文法が分かった。分かっただけではダメで、これが分かれば、それを使ってどんなことを考えて、どういうような判断をして、どういう風に英語で表現をしていくのかというところまで持って行かないと、本当の意味での学力にはならないのではないか、という風に考えた訳ですね。これは他の教科も同じですよ。

ですから、今回、大学入試センターの試験がどんどん変わりますけれども、英語以外の試験においても筆記問題が出てきますね。筆記問題をなぜやるかというと、思考力とか判断力とか表現力を本当に試すのであれば書かせないとダメでしょう。単なる選択肢問題だけで、マグレで当たったとか言っていたのでは思考力も測れないし、判断力も測れない。だから実際に書いてみて、はじめて本当にその知識が身に付いたかどうかが分かるんだと、そういう判断ですよね。

英語においては、それがどうなっているのかというと、いわゆる４技能試験と言われる「聞いて、話して、書いて、読む」という、全ての能力をきちんと測るようなテストによって、思考力・判断力・表現力が試せると判断されている訳です。先ほどから申し上げているように、今の若い日本の中学生・高校生、あるいは大学を卒業したばかりの人たちも英語に自信がない。それはなぜかというと、知識はあるんだけど使えないからですね。

知識として覚えた英語を活用する術を知らないから、だから結局外国の人たちと会った時に何も言えないとか、聞いても理解できないとか、反論もできないとか、自分を表現することができないというので、これはやはりマズイ。もしきちんとこうやって知識・技能を使って、思考力・判断力・表現力ができるようになれば、これが身に付いていけば学びに向かう力がどんどん高められていくだろう。

「あぁなるほど、こうやって自分をもっと高めていけるんだな」と、人間性も高まっていって、そしてもっと自信を持って社会とか世界と関わっていくという人間が育成されるのではないかということなんですね。だから、本当にその自信がない若い人たちが今育成されているんだとすると、ここのところを強化することによって自信ができる人間を育成できるのではないかということなんです。英語教育においては、まさにそれを今回やろうとしています。

これは全体の中で英語だけではありませんが、では英語教育はどういう具体的な改革を行うかということですが、2013 年 12 月に文部科学省から提案された「英語教育改革実施計画」というものがあります。これをベースに私たちがやっていた英語教育の在り方に関する検討会というのが、この具体的内容を検討

するように依頼されまして、色々検討した結果が今回の学習指導要領の中に反映されているとお考えいただければ良いと思います。概要はこれとほぼ変わりません。

では、どういうことをやるのか。１つは小学校の問題ですよね。現在は５・６年生で「外国語活動」という形で、小学校で必修の英語が入っています。でも外国語活動というのは教科ではないんですね。教科ではないということは何かというと、明確に学習指導要領の中でこういうことを教えなさいという具体的目標がないんですね。

概要はあるんです。楽しく、英語に慣れ親しむ。異文化、国際理解を促進するというのはあるんだけど、文法でこういうことをきちんと覚えましょうとか、音はこういう風な形できちんと覚えましょうというような具体的な目標が記されていない。したがって外国語活動の場合に一番大事なのは、楽しくコミュニケーションするという、体験をすることなんです。体験学習が一番大事な部分なんですね。それが今の外国語活動なのです。

文部科学省としては色々調査をした結果、それなりに成果を挙げていると評価しています。確かに子どもたちの 70%以上は、外国語活動の英語は楽しいと言っていますし、やさしいと言っているんですね。更に小学校の先生も子どもたちが本当に変わってきた。積極的に外国の音に慣れ親しんで、そして例えば ALT とか外国の人たちともどんどん自然に話をするようになってきたり、異文化に対する関心が高まってきていると言っています。そういう意味で非常に効果が上がっているという風に考えている。

中学校の先生たちの結果を見てみても、小学校で英語をやった子とその前の子たちを比べると、例えば英語の活動に中学校に入ってからも積極的に関わるようになってきたとか、聞き取りが良くなってきたとか、発音も良くなっているとか、国際理解に対する意識が本当に高まっていると、良いことだらけなんですね。

良いことだらけなんだけれども、問題は中学校に入って聞き取りが良くなってるにもかかわらず、文法は何も分かっていないし、単語は何も読めないし、読み書きはさっぱりできない。そうなると「何であんなに理解できているのに単語の綴りさえ分からないんだろう」とか、中学校の先生たちにしてみると、どうしても書き言葉を中心にずっとやってきているというところがありますので、それを小学校はやっていないので、ものすごいギャップを感じるんですよね。

私は、今でも色んな小学校に入って、ある時、私と同僚が６年生がちょうど授業を終わって出て来たので、一人の生徒に「どう？英語、楽しい？」と聞くと、「うん、楽しい」と、「英語、わかる？」と聞くと、「わかんない」と言っていましたからね。

つまり、“thank you”はサンキューとして、お礼を言うときに使うんだとは知っているんだけれども、“thank”“you”という２つの単語だということは教えられていないから、知識としては知らないんです。だから活用はできる、だけど知識という面では分からない。だから理屈は分からない。だから分からないと答えるんです。５・６年生ぐらいになってくると、中学生と認知発達のレベルは殆ど変わらない。全く同じぐらいな訳で、やはり知的刺激が欲しいんですよね。

ところが今の外国語活動、５・６年生がやっているのは知的刺激がちょっと少ない。体験学習でやっていますから楽しいんだけれども飽きてくるところがあったり、「もうちょっと何か知りたいのに」というのがあるんですね。だから時々小学生が「先生、これってどういう意味？」とか聞いてくるんですよね。聞いてくるということは、それだけやはり知識としても知りたいという欲求を持っている訳ですよね。

そういうことを色々考えて、しかも中学校に入ると知識・技能としての英語は殆ど身に付いていないので中学校の先生も戸惑ってしまうので、そのために小中が上手く接続ができていないことから、今回は小

学校の中学年、３・４年生で活動型と言われる外国語活動を入れることになりました。

ここで体験したものを、同じ小学校という環境の中で教科、つまり学習指導要領の中に目標が明確に定められている教科としてまず入れていきましょう。そうすれば３・４年生でやってきた内容をベースに５・６年生で、「3・4 年生でやったことは実はこうなんだよ」という形で、接続を上手く保ちながら知識も与えるということなんですね。後でもっと詳しく学習指導要領については話しますが、そういうことです。

教科になれば５・６年生が終わった時には文法で是々こういうことはもうやっていますよということが明確になりますので、そうなると小・中の連携が今よりも上手くいくのではないか。中学校の先生も小学校でここまでやってきた、これがはっきり分かります。じゃあ中学校ではここから次、こうやってやりますよというのが、よりはっきりしますよね。そうすると小・中の連携も上手くいくのではないかということなんです。

それに対して、問題は誰が教えるかということなんです。担任の先生に全てお任せという訳にもなかなかいかない。やはり小学校の先生は別に英語の教員でも何でもないので、特に英語が得意という先生は非常に少ない訳ですよね。

でも、そういう先生たちが教科になった時に評価もしなければいけなくなると、自信がないんですね。だって専門ではないので、どうやって私が評価するんですか、私がやっていいんですか？と疑問に思ったり、不安に思うのは当たり前な訳ですね。そこのところをどうやっていくか、これについても後でまたお話をさせていただきたいと思います。

もう１つは中学校です。今の状態だと、せっかくコミュニケーションを中心に体験学習として小学校で英語をやってきても、中学校に入るといきなり文法が出てきて、読み書きが出てきてという知識・技能が中心の教育がポーンと入ってきてしまうために、凄く大きなギャップが生まれて上手くいかないところがあるんですね。

ところが、今回は中学校の英語の授業もできる限り英語でやるようにとなっているのは、小学校からの接続をより上手くするために、小学校はだいたい英語でやっている訳ですから、同じようなやり方をしてもらいたいわけです。内容は前倒し、中学校の内容を小学校５・６年生に前倒し、教え方の後ろ倒しと私は言っているんですね。

小学校でコミュニケーション中心の教え方をやっているのを、中学校でも後ろ倒しでやってもらえれば、子どもたちにしてみると、よりスムーズに中学校の授業に入っていけるのではないかということになる訳です。

これだけ下からどんどん変えていっても、結局、日本の英語きょういくが変わらないのはなぜかというと、大学入試が変わらないことが一番大きな問題だと言われています。そこで今回は大学入試も４技能テストに変えましょう、しかも外部の試験を活用するようにしようということになりました。外部試験の利用は既に多くの大学でやっていることなんです。

これができれば、小学校からずっとコミュニケーション中心にやっていって４技能がどんどん育まれていきますし、それが最終的に大学入試というところでも、４技能試験という形で測定される訳ですから、非常に良い流れができる。一貫性がそこで生まれるということになります。

そこで、ではどういう風にして教えるのか。先ほどの知識・技能ですね、これを思考力・判断力・表現力、そこに持って行くにはどうしたらいいのかということですが、その方法として、よく言われているのがこのアクティブ・ラーニングといわれてきたものなんです。

学習指導要領の中では、「主体的・対話的な深い学び」という言葉に置き換えられていますが、同じこと

です。つまり自ら学ぶ。しかも他者と一緒に対話をしながら学んでいく。それによって「なるほど！」という深い学びへとつながっていく。そういう授業をしてくださいと。

どんな授業がこのアクティブ・ラーニングに相当するかというと、発見学習とか問題解決学習、体験学習、調査学習などが含まれる。しかも教室の中ではグループディスカッションとか、ディベートとか、グループワークを行う。このように生徒中心に授業を展開することによってアクティブ・ラーニングが成立するんだと言っている訳です。

先ほど、小・中学校の英語もできるだけ英語でやりましょうという話をしましたよね。中学校の先生、高校も今そうなっているんですけれども、「できるだけ英語でやれと言うんだけれども、45分英語で喋るというのは大変なんですよ」という疑問が出されることがあるんだけれども、アクティブな授業の場合、殆ど生徒が喋っているんです。先生が喋るのは10分ぐらいで良いです。

つまり、これが英語の授業は基本的に英語でやるということなんですよね。だから先生が45分ずっと喋りっ放しだとたぶん生徒がまず「何を言ってるか分からない」と言って諦める。寝てしまう。それで益々英語が嫌いになる。やる前から分かっていますよね。

実は、大学もそうなんですよね。EMI“English-Medium Instruction”といって、できるだけ色んな専門の授業を英語でやりましょうと上智大学でも色々やっていますし、私のセンターでは全部英語でやったりしているんですけれども、あるとき法学部の先生が私のところに来て「英語でやれと言うからやってみたよ、90分英語で喋ったら、誰も何も分かってなかった」と言うんですよね。

考えてみると法律の話、日本語でやっても難しいのに、それを英語でやった訳だから、益々生徒は分からなくなりますよね。「どういう授業をしたのか？」と聞くと、「いや、だから講義を90分した」と、「英語で授業をやるというのはそういうことじゃないんですよ」と。

英語で授業をやるということは、その間に生徒たちが英語で先生が言ったこと検証したり、例を考えてみたり、色んな課題をそこでやってみたりしながら自分で学ぶ。そういう授業がアクティブ・ラーニングであって、それが英語で授業をやることの意味ということを理解してもらうのはなかなか難しいです。

でも、そういうことなんですね。小学校は意外とこれができているんです。というのは活動中心なので、生徒がどんどん喋っていますよね。だけど中学校になると廊下を歩いていてもシーンとしていますからね。何が聞こえるかというと、先生が喋っている声しか聞こえないというのがよくありますよね。

あれは、いくら先生が英語で授業をやったとしても、殆ど意味がないだろうなと、そこのところの履き違えということが凄くあるんです。だからここのところが凄く大事なんですね。アクティブ・ラーニングはまさに生徒がアクティブになるんです。先生がアクティブになっても仕方がないんですね。そこのところを間違えてはいけないということです。

では、今言ったことを立証するというか、それを具体的にお見せするために、今の中学校の英語教育の現状を少し見てみたいと思います。これは文部科学省の教育課程実施状況調査の結果によるものです。現在、中学校３年生までに英語の力として到達してほしいのは、英検３級です。しかも目標は全生徒の50%と言っています。ところで、いつまでに50%でしょうか？

2020年ではないんです。そんな悠長なことは言っていませんよ。この50%という数字が出てきたのは、平成25年に出された第2時教育振興基本計画で示された目標です。その最終年度までに、この50%に到達してくださいとなった。その最後の年はいつだと思います？　平成29年度です。今年です。今年度の終わりまでに、今現在、英検３級を取っているのは36.1%ですよ。さあ、あと半年ありません。じゃあどうやって14%伸ばすんでしょうか。

厳しいですよね。まず殆ど無理じゃないでしょうかね。なんで英語力が伸びないんでしょう。むしろ昨年度は少し下がってるんです。凄いショックですよね。小学校５年生から英語を始めた子たちが下がってるんですよ。つまり、小学校５年生から英語を始めたら伸びるだろうと思っていたら下がってしまったという、かなりショッキングな結果ですね。

次に英語の先生たちが授業の半分以上を英語でやっていると答えている先生の割合は中1から中3まで、全学年で60何%でしょう。凄いですよ、これだけやっているのなら。

にも関わらず、生徒の力が落ちているんですよね。何でだろう。考えなければいけないですね。実際に生徒の英語力というのを見てみると、国は50%以上が英検３級と言っていますけれども、目標を達成していたのは2015年は千葉県だけだったんですね。16年になると、もうどこも50%を超えていない。

あと教員ですけれども、実は中学校の英語教員の英語力というのは準１級が目標なんですね。これも今年度の終わりまでですから、これは 50%の英語の教員、中学校の教員が準１級を取ってほしい訳ですが、あと18%ですね。でも伸びてはいますよね。

英語の先生の英語力は伸びている。英語で授業をやっている先生の割合も伸びている。にも関わらず、生徒の英語力は下がっている。おかしいでしょう。先生の英語力が伸びて、英語で授業をやっている割合が増えたら、生徒の英語力は伸びるはずですよね。なぜ伸びないのかな。そこのところをこれから見ていきます。

ベネッセさんの調査の結果をみると、中学校の先生たちが授業で一番何をやっているのか。一番は、音読です。ほぼ100%の先生が音読をやっていますね。２番目が発音練習をやっていますね。これも96.2%、文法の説明が96.1%、文法の練習問題92.7%、教科書本文のリスニング、たぶんCDなどが付いていますからそれを聞いてやっている活動でしょう。

それから、よく教科書の本文の後ろに Q&A、質問がありますよね。それに答えているというのが次ですね、87.1%。だいたい80%以上のものだけを選んでいますが、キーセンテンスの暗唱と運用というのは例えばパターン練習とかですよね。さてこの中で思考力・判断力・表現力に相当する活動はいくつありますか、ゼロでしょう？

ここにある活動は全て知識・技能ですよね。だからどんなに英語を使ったとしても“Repeat after me”としか言わないとか、“Translate this sentence into Japanese”としか言わないとか、“Make pairs and do this exercise”としか言わないとか、ということだとしたら生徒の英語力は伸びないんですよ。

では、一番やっていないところを見てみましょう。ディベートやっていません、ディスカッションやっていません、英語の教科書本文の要約を書く、要約を書くというのは自分で考えて自分の言葉で書く訳でしょう。これもやっていません。初めて見る英語を読む、推測をしながらこれはどういう意味だろうと考えながら読む、ということをあまりやっていない。

教科書の本文の要約を話す、“story－retelling”のような形で自分の言葉で内容を言ってみたりする。あるいは初めて聞く英語を聞いて、どういうことを言っているのかを推測をしたりする。そして即興で自分のこととか、気持ち・考えなどを英語で表現する。やっていない活動は全て思考力・判断力・表現力なんです。分かります？

つまり、一番よくやっているのが知識・技能なんです。殆ど思考力・判断力・表現力に相当するような活動は、ご覧のようにやっていないんです。しかも「よくやる」というのを見ると10%以下しかやっていない。もしこれが本当だとしたら、あの結果は頷ける。でも色々あるんですよ。

私があるとき埼玉県のALTの研修に行きました。ALTの研修に行って話をして、その後たまたまALT、若

いアメリカ人の先生が私のところにやって来て、自分は今高校２年生でオーラルコミュニケーションを教えているんだけど、あるとき自分が教えている生徒が自分のところにやって来て、「先生の授業、やめてください」と言った。「えっ？」と聞くと、「だって英会話って受験に関係ないから」と。

試験に出ないんだから、だからやる必要がないんだ。あの時間は無駄なんですと生徒が言いに来た。たぶん親に「言ってこい」と言われたのではないかという気がするんですね。学校に文句を言うんですよ。「あんなことをやらせて大丈夫なんですか、うちの子は」と言ったりするんですよね。それで「じゃあどうするの？」と言うと、「ちゃんと文法を教えてくれる先生に習いたい」とか、「過去問をちゃんとやってもらえる先生に習いたい」とか。

結局、コミュニケーションをやっても受験に役に立たないと思っている。そこで本当にそうなのかというのを調べてみたかったので、こういうことをやってみました。これはベネッセさんにやはりお願いしたんですね。「スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール」（SELHi）といって、コミュニケーションの活動に特化したような授業をやって、それで文部科学省、国から補助金を貰った学校と普通高校とを比較したものです。

ディベートを一生懸命やったりディスカッションをやったりとか、エッセイライティングをやったり多読をやったりとか、いわゆる普通の文法・訳読ではないことを一生懸命にやっていたのが SELHi です。そういう学校の１つの条件は先生たちが英語で授業を行うということだったんですね。

最初の頃、私が授業を見に行った時には凄い苦労をしていましたが、段々だんだん英語で授業をやることが当たり前になってきて、生徒も授業を英語でやられることに凄い慣れて、全然違和感なく本当に上手くやっていたんですね。ある意味、だからこそ今現在使われている学習指導要領は高等学校だけが英語の授業は基本的に英語でやりましょうとなっているんですね。中学校はなっていないんです。なぜかというと SELHi が成功したと思っているから。

だから、同じように他の高等学校でも英語で授業をやっていたら、ああいう風になるんだという、そういう憶測があった訳ですね。この調査では偏差値を３つのレベルに分けて、そしてそれぞれベネッセさんがやっている“GTEC for Students”という英語コミュニケーション能力テスト、３技能のテストなんですが、それ使ってひかくしたものです。

高校１年の時にはまだ SELHi も始めたばかりですから、この“GTEC for Students”で測ってみると、普通校とあまり点数が変わらないんですよね。ところが２年になると差が出てきますね。３年になると更に開きますよね。やはりコミュニケーション能力中心にやってきているから、コミュニケーション能力を測るテストでは高い訳ですよね。

ところが一番見ていただきたいのは、最後のセンター試験の結果との比較です。高校生にセンター試験の自己採点の結果を教えてもらった訳ですね。その結果、大学入試においても、どの偏差値レベルにおいても SELHi の方が結局よかった。

つまり、ディスカッションをやってディベートをやるということは、余程の文法力がなくてはできないんですね。たくさん物を読んだり書いたりするということをやらないとできないんですね。だから本当に活用しているんです。活用すればするほど知識・技能は定着するんです、当たり前なんですけど。

だから知識・技能だけを一生懸命に丸暗記しても、それは定着しないんですね。だから結局そういうコミュニケーション活動をやるということが、全体として一番良いんだと。今回、４技能テストが入試に使われるというのも、実はこういう背景があると考えていただいて良いと思います。

さあそこで、小学校はどうなのかということで、学習指導要領を見てみます。今回、学習指導要領の中

で非常に大事なのは何か。まず外国語活動なんですが、これは現在の外国語活動と同じように目標のところを見てみますと、「コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を育成しましょう」、“素地”という言葉が使われていますね。

ですから、別に“基礎”となるような単語とか文法は必要なく、コミュニケーションをするという素地を作ってください。コミュニケーション、楽しいな、外国語って面白いなという、そういう素地をまず作ってあげてくださいというのが目的なんです。つまり、新しい学習指導要領でも、３・４年生では素地を形成することが目的になっています。

もう少し詳しくみてみると、次のところが非常に大事なんですね。まず「体験的に理解する」というのは、今も体験学習ですからこれは同じですが、「気づく」ということが書かれています。今回は後でお見せする小学校の教科もそうですし、中学校の学習指導要領もそうなんですが、この「気づく」という言葉が使われています。

これは何かというと、生徒が自ら「あれ？これって面白いな、日本語と発音が違うな」とか、「こんな表現を使うんだ」とか、「こんな生活習慣があるんだ、日本と違うなぁ」ということに気付くように、上手くコミュニケーション活動をやってくださいということで、ここが凄く大事な訳ですね。まず好奇心を持たせてやるというのが思考力の出発点ですよね。

物を考える時の出発点というのは、まず疑問を持つことですね。その疑問をきちんと持てるようにやってください。それをしかも体験的な理解の中で、そして基本的な表現に慣れ親しむような、そういうコミュニケーション活動の中で気付くようにしてください。単語を１つ与えて「はい、気づけ」と言っても絶対に気付く訳ないですからね。そんなことはあり得ないですね。

もう１つ大切なのは、目標のところの一番最後にありますが、これも今と変わりませんがコミュニケーションを図ろうとする態度を育成してください。これは外国語活動ですから、当然知識を与える訳ではない。

次に、今回出て来た外国語教科はどうなのかということを見てみましょう。今回は教科に関しては、コミュニケーションを図る資質・能力の育成なんですが、その基礎を育成することが目標になっています。

基礎となる資質・能力、基礎というのは何かというと、基本的な単語であったり構文であったりとか、要するに英語の基本的な語順のようなものですね。英語のもっとも大事な文法の要素というのは語順です。日本語と違いますよね。そういう本当に基礎となるようなものに関して資質・能力を育成してくださいという訳です。

それも単に上から目線で教えるんじゃないですよ。外国語活動と同じように気付かせます。英語と違う、日本語と違う、気付いた。気付いたら「それはね、実はこういうことだよ」と言って、気付いた上で教えます。気付きもしないのに「はい、これ覚えろ」と言えば生徒は嫌になります。

でも、「先生、これってどういうことだろうね、これ面白いね」と言った時に、「それはね、実はこうだよ」という風に教えるとスッと入ってくる。そういう１つの知識・技能の与え方をしてくださいと言っている訳です。だから実際のコミュニケーションの中で教えてねと、コミュニケーションから取り出して知識・技能だけを教えてもダメですよということです。

それから、もう１つ非常に大事なのは、今回は読み書きが入ってきます。読み書きはどういう風に入ってくるのか。音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読む。つまり音で聞いて慣れ親しんで理解できたものをベースに、「じゃあ今聞いてわかったよね。実はね、これは書くとこうなるんだよ」と、文字を読ませるということですね。

元々たぶん外国語活動の中で、もう既にやっていますね。絵を出してパターン練習やエクササイズをやる場合、絵の下に文字が書いてある。だいたい付いている。付けた方が良い。教えなくても良いから、文字が付いていると、知らないうちに生徒はその文字をきちんと認識ができるようになる。

認識ができるようになれば、ここは簡単です。全然問題なくスッといけますね。これは単語だけではなくて語句でやったりとか、フレーズだとか、いわゆる節であったりとか、そういうような部分まで慣れ親しんだものであれば少しずつ読めるようになるはずです。但しとにかく音声で理解できたものですよ、ということがまず第一です。

同じように、この音声で慣れ親しんだ上に読めるようになったものを、今度は語順を意識しながら書かせてください。ただし、これは書き写させてくださいということです。ソラで書かせるのではありません。慣れ親しんで分かっているものを「じゃあ書いてみようか」というので書くという訳です。こういうような形で今回入れられています。

ところで、今回学習指導要領の中心となっているのは、先ほど言いました「思考力・判断力・表現力」な訳ですけれども、英語においては何かというと、それが“Can do”「英語で〇〇ができる」、英語で議論ができる、英語で発表ができる、英語で自分が思っていることを相手に伝えることができるというような「〇〇ができる」という、そういう目標に向けて授業を進めるということです。単なる単語をいくつ知っているとかではなくて、何かが英語でできるということが大事なんだということです。

ここでまず１つ見ていただきたいのは、４技能・４技能と言いますが、実は５技能ありますね。話すことというのは、実は２つの領域に分かれている。発表とそれからやりとりという２つがある。だから人によっては５技能と言う人もいるし、人によっては４技能５領域という風に言う人もいます。どちらで呼んでも構いません。別に大差はないと思います。

ただ、少なくともこの「話す」というのは単に一方的に喋るだけではなくて、相手とやりとりをするというところが非常に大切な部分だということを理解していただければ良いと思います。ここにあるのはCEFR といってヨーロッパの共通参照枠で言語レベルごとに記述したものですが、だいたい A1 というのは英検３級ぐらいです。それから A2 というのは英検準２級ぐらいです。ピッタリではありません。B1 というのはだいたい２級ぐらいのレベルで、こういうことができるようにしてくださいと言っているわけです。

例えばやりとりで小学校の５・６年生辺りで目指すべきものをみてみましょう。そうすると例えばやりとりを見てみると、相手のサポートがあれば個人的な関心事について質問に答えることができるように指導する。サポートがあればですから、色々人からも言ってもらったりとか、助けてもらったりしながらでも良いから、とにかく質問に答えられるようにすればいいんですよというのが、まず第１ステップですよね。

もう少し上になってくると、ごく身近な話題であれば基本的な表現を用いて簡単な質疑応答ができるようにしてください。場合によっては５・６年生がここまで行くという可能性も十分ありますね。ですからこの辺りの“Can Do”ですね。こういうことができるようにしてくださいというのが、今回の学習指導要領の目玉です。これが先ほど言いました思考力・判断力・表現力に相当する部分になるという風にお考えください。

さあ、そうすると学習指導要領の書き方としては「目標」というのがあって、次に「内容」というのがありますね。その内容の中に実を言うと知識・技能が入っているんですね。知識・技能が先に来ているんです。知識・技能で例えば文法はこういうものですよというのが、ザーッとリストとして示されています。その次に思考力・判断力・表現力というのが来ているんですね。

何となくその組み方からすると、最初にまず知識・技能の言語要素を覚えなければいけないように思ってしまうんですけれども、実は形として考えているのはこういうことなんです。一番中心は先ほどから言っているように“Can do”ですから、思考力・判断力・表現力が一番中心なんです。

これができるようになることが一番大事なので、これをするために必要な言語知識を選んで教えてくださいということなんですね。だから知識・技能から入るのではなくて、思考力・判断力・表現力の“Can do”から入って、それに必要な知識・技能を与えて、具体的言語活動へとつなげてくださいという風になっている訳です。

ここでもう１つ、文法の扱い方なんですが、これも非常に大切ですね。中学校になってくると本当に規則として文法を入れていきますけれども、小学校では違います。例えばhe・sheなどの三人称単数です。よく中学校でやるのは「I am・You are・He is・She is・They are」と言って表で教えますよね。あんなことをしてはダメなんです。

何をするかというと、まず二人で“What fruits do you like?”と言って“I like〇〇”、“What fruits do you like?”と、まずIとYouでやっていきますね。これを何度かやったら“Change partner”、パートナーを替えて“What do you like?”、“I like〇〇”、今度はパートナーを変えて、次に人に前の人の好きなくだものを聞く。「じゃあ、彼はどうだった？彼は何が欲しいと言ってた？」と言った時に、“He likes apples”、「彼女は何が好きだと言った？」、“She likes apples”となりますよね。

つまり、コンテクストの中でheとかsheというのを使い分けられるように教えてくださいというのが基本の考えなので、抽象的な規則として教えるのではありません。これがまず１つ大事な点です。

もう１つ、これは動名詞で“I like playing tennis”というのがあったとしますね。中学校の先生は“playing tennis”、これは動名詞で名詞と同じような働きをするから、実は主語でも使えるんだよとか言って、“playing tennis is...”とやっている先生がいるかもしれませんが、こういうことはやっちゃいけないことになります。

小学校においての動名詞は、こういう文脈の中で覚えればいいんで“I like playing tennis, What do you like to do?”、“I like playing baseball”、“I like playing piano”、“I like playing〇〇”という風に、この後に出てくる動名詞として覚えればいいのです。これだけを１つの文法的な抽象的なものとして教えるということではないですよということです。

さあ、そこで小学校と中学校の学習指導要領のそれぞれ技能の教え方について見てみますが、簡単な語句や基本的な表現で話される短い会話、イラストとか写真などを参考にしながら聞いて、必要な情報を得るということと書いていますね。これはサポートです。色んなものを使いながら聞き取れるような練習をしてくださいということなんです。

中学校ですが、非常に大事なのは聞き取りであるにも関わらず、その内容を英語で説明する活動も含まれているということです。聞くだけでは聞き取りの目標にはならない。聞いた上で反応しないといけない。反応まで含めて聞き取りができたかどうかが判断できる。つまりここで技能の統合が行われているんですね。中学校の学習指導要領にはもう既にそう書いてある。

読むことに関しても、小学校ではまず音声で慣れ親しんだものを絵本などのコンテクスト、文脈の中できちんと識別できるような活動をしてくださいと言っています。文脈がなければダメなんですよ。中学校においては読むんだけれども、その内容について賛否、意見を述べなければいけないんです。反応しなければ読んだことにならない。読解ですからね。読んでそれを解する訳ですから、解釈するというのは自分の意見を持つということですから、そこまで入れて初めて読解になるということなのです。

あとは、やりとりに関しては相手との簡単な短い会話でやりとりをする。中学校においても相手の質問に対して適切に応答したりする活動をやって、発表するというのは今度は身近なことについて、自分が思っていることを少し英語で言ってみよう。中学校においても英語で自分の気持ちだとか考えなどを話してみようという訳です。

次にライティングです。まず、小学校を見てください。ここが「書き写し」なんですが、音声で慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いた例の中から言葉を選んで書く活動ですから、言葉を選んで書くということは書き写すということです。分かりますよね。つまり全く何も知らないことを書けと言っても小学校は難しい。だからそこまで行ける子は良いかもしれないけれども、それがみんなに課される目標ではないんです。

１点だけ言っておくと、学習指導要領というのはだいたい最低基準と言われていますから、一番基本的にみんなができなければいけないという部分ですので、もっとできる子がいればまたちょっと違ってくるかもしれません。でもこれが最低基準として、言葉を自分で選んでそれを書くんですから、書き写すということになるんですね。

それで、中学校において「書く」ということですが、書くためには聞いたり読んだりするという、そういう内容をベースに書かなければいけない訳ですから、ここでも技能の統合が行われているということになります。

時間がもうだいぶなくなってきましたけれども、今回小学校５・６年生で教科として入ると言っても、なかなか 45 分の授業を２コマ取るのは難しい。そこで現在いわゆる短時間学習、モジュール学習というものが考えられている。文科省の調べによると、現在 10 分から 15 分未満のモジュールを週３回やっているというのが一番割合としては多いみたいだということですね。

モジュールと言っても、今回の 45 分の授業と完全に別のものにしてはいけません。要するにこのモジュールというのは 45 分の授業と関連づけてやらないといけない。全く違うことをやってはいけませんよ、元の内容ときちんと関連づけながら教えてください、ということです。

それから、来年度からは移行期間に入ります。移行期間に入ると小学校５・６年生においては、今やっている『Hi, friends!』のような外国語活動、プラス教科に向けて今回出てきた『We Can!』という教科書がありますけれども、それをベースにしながら 15 コマ分ぐらいは何らかの形で、教科としての英語の“試し”と言うんですかね、それを少し入れてください。これは総合的学習の時間を使っても良いですよという話になっています。

小学校の３・４年生においては全くやっていないというのが現状ですから、外国語活動として小学校３・４年生でちお ry15 時間やってください。それから誰が教えるのか？ですが、非常に大変ですね。現在は専科指導をやっている先生は非常に少ない。小学校の教員で中学校の英語の免許を持っている人も４％ぐらいしかいない。これで果たして本当にできるのか、なかなか上手くいかないかもしれない。

外国語活動に関しては、もう既に５・６年生で 2011 年からやっていますから、基本的に学級担任と ALT とか地域の人材などが入って、一緒に楽しくコミュニケーション、体験授業をやれば良いということなんですが、問題は教科としての英語ですよね。なぜかというと、教科になってくると評価をしなければいけない。となってくると小学校の先生は不安ですし、自信がもてません。そうするとどうしても特別免許状などを発行して専門の人にはいってもらわなければなりません。今もう既に小学校の英語でも特別免許状を出せることになっています。

まだ出しているところは殆どないというのが現状なんですが、そういうものを出すことによって英語の

専門、あるいは堪能な人を入れることによって、担任の先生と一緒に授業をやるようにする必要があります。そうしないと担任の先生に対する負担が益々大きくなって、本当に大変なことになると思います。

最終的には担任の先生が全ての技能、全ての教科を教えるということを考えれば、一人でもできるようにしたいというのが文科省の考えではありますが、現状ではまだなかなかそうはいかないだろう。少なくとも概算要求の中では、専科教員のための予算というのを相当要求しているんですね。ただ財務省が果たしてどこまで認めるのかは全然わかりません。

これで最後です。最後は何かというと、内容ですね。内容は学習指導要領に書かれていることなのですが、英語だからといって英語さえ教えていれば良いのではなくて、英語というのは道具ですから英語を使って何を教えるの？という、つまり教科横断型の内容にしてくださいということになっています。小学校は凄くそれがやりやすいんですよね。

実は現在指導に入っている学校というのは、CLIL という内容言語統合型授業をやってくれている学校なんです。その例もお見せしますが、教科の内容を使って英語を教えてたり、子どもたちの色んな生活経験だとか、そういうものを生かして英語を教えることを意味します。英語だからといって英語だけをやっているんじゃないですよ。英語は道具だから英語を使って他のものを教えるということです。

私が入っている小学校の 3 年生の授業を紹介しましょう。小学校３年生、ちょうど理科で「昆虫とその生息地」についてやったと言うんですね。それで小学校３・４年生の先生たち、中学年の先生たちが集まって、「今度の英語の授業どうしようか」というので考えたのが、昆虫採集をやろうということになった訳です。

虫の名前、10 個ぐらいですけれども、ザァーッと絵と一緒に出てきて、子どもたちはそれを見て読めるようになっている。それぞれがどこに住んでいるかというのは口では別に言いませんが、絵に描いてある。水辺の絵があったり、木の絵があったり、草っ原の絵があったり、４つか５つぐらい色んな生息地がある。

その生息地の絵の前に立っている子がカードを持っているんです。だから水辺の前に立っている子はホタルの絵が描いてあるカードを持っている。木の前にいる子はカブトムシの絵を持っているという風なことですね。そこに他の子たちが行って、“Do you have ○○？”と聞くんです。英語は簡単です。

それで“Do you have○○？”、“ Yes I do”、要するに昆虫採集ですからカードを籠に入れて集めていく訳です。集めるという活動だけなんですね。この授業は何をやっているかというと、英語を使って理科の内容をやっている訳でしょう。だから別に教科の内容をどうやって入れようとか、そんな難しいことを考える必要はないんです。もの凄く単純にできるんです。

あるいは、ある学校でやっていたのは粘土ですね。これは図画工作でやっていました。紙粘土で一生懸命動物をつくらせる。作っている間に先生が回ってきて、まだ作ってますよ、形になっていませんよね。“What’s this?”と聞く。すると子どもが「何だろう、英語で言えないな、これは象さん」と言うと、“Oh! It’s an elephant”と言って、一生懸命単語を覚えていく。

それをやっていくと、粘土で動物を作りながら英語の単語をどんどん“What’s this?”、“It’s○○”、全部覚えていく訳です。図画工作と合わせることも単純なんです。そんなに難しい英語を使う訳でも何でもない。そういうような教科横断型の授業をやって欲しいわけです。

ということで、ちょっとオーバーしましたが、終わりたいと思います。どうもありがとうございました。